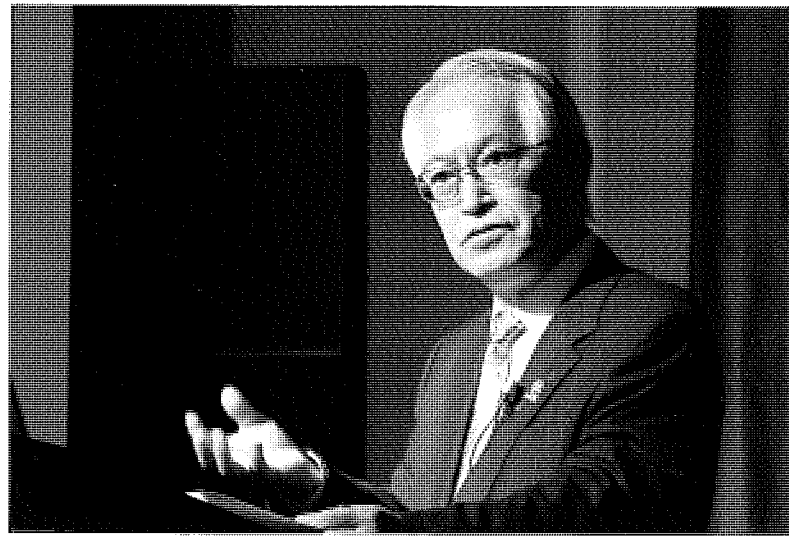


# 地区指導者育成セミナー



国際ロータリー 第2840地区パストガバナー  
前橋ロータリークラブ  
職業分類:乳製品販売

ほんだ ひろき  
**本田 博己**

## 演題「変わりゆく時代とロータリー」

2840地区、群馬からまいりました前橋ロータリークラブの本  
田博己と申します。どうぞ、よろしくお願ひいたします。私の職業  
分類は、乳製品販売。群馬でヤクルトおじさんをやっております。  
ヤクルトがいかに健康にいいのかという話だったら何時間でも  
話したいのですが、今日はあまり時間がありませんので、皆  
さんも健康のために1日1本、ヤクルトをぜひお願いします。以  
上でヤクルトの宣伝を終わります。

本日の題「変わりゆく時代とロータリー」というのは、駒井ガ  
バナーとご相談して、こういう題にしたんですが、変化の激しい  
時代で、この先のロータリーをどういうふうに考え、どういうふう  
に行動しなければいけないのかということ、皆さんと一緒に  
考えたいと思います。用意したスライドが、だいふ、削ったんで  
すが、99枚あります。時間が限られておりますので、どんどん飛  
ばしてお話します。データは置いていきますので、必要な方はあ  
とでガバナー事務所にお問い合わせいただきたいと思います。

私は前橋ロータリークラブでだいふ前になりますけど、2003  
年から3年間、クラブ改革のプロジェクトを経験しました。今から  
思うと私たちは、クラブのビジョンとか戦略計画づくりをやった  
のだなと思います。現在は2016年から全国で「日本のロータ  
リー100周年実行委員会」というのがありまして、その中の「ビ  
ジョン策定委員会」で活動しています。日本のロータリーのこれ  
からのビジョンを考えるというようなことをやっていますので、  
そのへんの話もできればと思います。

その前に、「ロータリーの友」の2017年1月号に私の文章が  
載ったんですね。4ページくらいのもんですが、これは投

稿ではなくて、編集部から依頼されて寄稿したものです。タイト  
ルが「『職業奉仕』はロータリーの根幹か?」というちょっと、けん  
か売のような題名だったんですが、私自身は個人的には  
争いごとが嫌いで、穏やかに生きてきた人間ですので、誤解し  
ないようにしていただきたいと思ひます。

これは私の印象ですので正確ではないんですが、その  
「ロータリーの友」の1月号、私が書いた文章に対して読者の反  
応、1割から2割くらいの方は、「わが意を得たり。よく言ってくれ  
た」と大賛成していただきました。奉仕プロジェクトの委員長や  
海外クラブの経験者、若い世代のロータリアンの方が多かつ  
たように思ひます。それから「職業奉仕が根幹に決まっている  
だろう、ガラパゴス化という言葉も使ったのですが、『ガラパ  
ゴス化』とは何ごとか」と激怒された方がベテラン会員、地区  
やクラブの職業奉仕委員長を経験された方々から、反応があ  
りました。たぶん、2割から3割くらいじゃないかと。もっと多い  
かもしれませんがこんな感じですよ。もう1つは「難しい」と。「ど  
うしてそんなことを議論するの」「何が問題かよく分からない」。あ  
るいは全く無関心というのが、過半数の方々じゃなかったかな  
と思ひます。

『ガラパゴス化』という言葉を使っただけで、『職業奉仕』  
という言葉の使い方のずれを解消できないでいることが、日  
本のロータリーのガラパゴス化を招いている一因だということ  
を私、書いたんです。そしたら、叱られました。「本質から乖離し  
ているのは、RIではないか。日本人の職業観はガラパゴス化し  
ていない」と、特に先輩の方からの反発がありました。

私の主張の真意は、日本のロータリアンの職業観を否定す  
ることはありません。日本人の職業奉仕論は、世界のロータ  
リーでは意味不明で通じないと申し上げただけなんです。

簡単に寄稿文の要旨を申し上げます。

『従来、語られてきた日本の職業奉仕論とRIが推奨する職  
業奉仕は、内容が異なっています。職業奉仕という言葉で、世  
界のロータリアンは、奉仕部門の1つとしての職業奉仕の活動  
を語っています。一方、日本のロータリアンは、奉仕の理念の職  
業への適応や自分自身の職業観を語っているという違いがあ  
ります。私の提案は、職業奉仕という言葉で奉仕の理念の  
職業への適応や自分の職業観を語ることを、いったん、やめ  
てみたらどうですか、と。そして、クラブの活動のための枠組み  
である五大奉仕部門、その第2部門である職業奉仕部門の  
活動だけに職業奉仕という言葉を使ってみたらどうですかと  
いうことを提案いたしました。職業奉仕という言葉ではなく、世  
界共通の「奉仕の理念」、「奉仕の理想」と今まで言ってきた  
「奉仕の理念」という言葉で、ロータリーの理念についての議  
論を深めていこうというのが、私の提案の真意です。なぜなら、  
ロータリーの目的は奉仕の理念を奨励し、これを育むことであ  
り、奉仕の理念がロータリーの根幹であるからです。』

私が言っているのは、これだけなんです。たぶん、難しく  
はないと思ひます。いかがでしょうか。

そこで、補足をしておきます。「ロータリーの目的」というのが、  
国際ロータリー定款と皆さんのクラブの標準ロータリークラブ  
定款にそれぞれ載っております。つまり、ロータリーの目的とい  
うのは、すべてのロータリークラブとロータリアンが、これを目的と  
しているということだと思いますが、その最初の文が、主文です。  
『ロータリーの目的は、意義ある事業の基礎として奉仕の理念  
を奨励し、これを育むことにある』ということですよ。

一方、五大奉仕部門というのは、クラブ定款にしか載って  
おりません。五大奉仕部門というのは、定款に書いている『本  
ロータリークラブの活動の哲学的および実際的な基準である』。  
(framework for the work of this Rotary club)ということ  
で、クラブの活動のための枠組みであるということが言われてい  
るわけです。その一つひとつの定義がその後に載っています。  
「クラブ奉仕」「職業奉仕」「社会奉仕」「国際奉仕」「青少年奉  
仕」の順に、個々の定義は、具体的な会員の行動やクラブの  
活動の表現をしております。クラブ奉仕は「行動」、社会奉仕は  
「取り組み」、国際奉仕は「クラブの活動」「プロジェクト」、青少  
年奉仕は「活動」、「プロジェクト」、「プログラム」という言葉で、  
具体的なクラブの行動や会員の活動を表現しておりますが、  
これまで職業奉仕の定義、説明にはそういう活動の内容が明  
記されていませんでした。

ところが、2016年の規定審議会で五大奉仕部門の第2部

### プロフィール

#### ■略歴

1950年(昭和25年)3月生 大分県別府市出身

#### ■学歴

国立名古屋大学文学部哲学科卒業

#### ■職歴

株式会社福武書店(現ベネッセ・コーポレーション)入社。  
辞典・書籍の編集に携わり、編集長・部門長を歴任。  
1992年(平成4年)群馬ヤクルト販売株式会社 取締役就任。  
常務・副社長・社長を歴任し、現在、同社 代表取締役会長。

#### ■ロータリー役職歴

(クラブ)

1996年5月 前橋ロータリークラブ入会

2001年~2002年 幹事

2010年~2011年 会長

(地区)国際ロータリー第2840地区(群馬)

2003年~2004年 会員増強・退会防止委員会 委員長

2005年~2006年 曾我隆一 ガバナー年度地区副幹事・事務局長

2007年~2009年 管理運営委員会 委員長

2008年~2010年 研修委員会 委員

2011年~2012年 ガバナーノミニ

2012年~2013年 ガバナーエレクト

2013年~2014年 ガバナー

2015年~2018年 地区研修リーダー、RI推進委員会委員長

(全国)

2014年~2015年 ロータリーの友事務所理事

(ロータリーの友委員会顧問)

2015年~2018年 ロータリーリーダーシップ研究会(RLI)日本支部

カリキュラム委員会副委員長、

ファシリテーター、地区代表

2016年~ 日本のロータリー100周年

ビジョン策定特別委員会委員長

2016年11月 RI会長代理(2620地区 2017年10月:2610地区)

2018年 RI研修リーダー

ポール・ハリス・フェロー(マルチプル)、ベネファクター、

メジャードナー、米山功労者(メジャードナー)

#### ■ロータリーに関する主な発表原稿

『「会員増強」とは「組織強化」である』、『ロータリーの基  
本～研修の手引き～』、『ロータリーの力～会長の時間抄  
録～』、『「奉仕の理念」が世界を救う』、『ロータリーはどこ  
に行く?～日本のロータリー100周年に向けて』(いずれも  
「ロータリー文庫」収録)

『ロータリーの希望～「奉仕の理念」とその実践をめぐ  
つて～』(2014.6地区HP)『「職業奉仕」はロータリーの根幹  
か?』(「ロータリーの友」2017年1月号)

門である職業奉仕の定義に黄色(画像13)の部分加わりました。『そして自己の職業上の手腕を社会の問題やニーズに役立てるために、クラブが開発したプロジェクトに応えること』、これが加わったんですね。これで「職業奉仕はクラブと会員両方の責務である」という言い方が30年くらい前に打ち出されたRIの方針であります、そのことが、ここで明文化されたと言っています。

世界のロータリーでは、自分の職業上のスキルをいかした奉仕活動は、個人が行うものであれ、クラブが行うものであれ、すべて「職業奉仕」の活動として活発に実践されています。

国際ロータリーが定義している職業奉仕というのは、ロータリークラブの奉仕部門の1つとしての職業奉仕です。いろいろ例をあげる時間がないんですが、例えばRIが発行している「職業奉仕入門」というパンフレットがあります。この中には、クラブにおける職業奉仕部門の活動事例がたくさん挙げられています。その中にVTT(職業研修チーム)、これはロータリー財団の補助金モデルの、グローバル補助金を使う事業の1つですが、それも職業奉仕の活動事例として明記されてるんですね。

日本とRIの職業奉仕の違いは、単に解釈の違いだろうとおっしゃる方がいます。解釈は違っていいんじゃないかと、日本は日本の職業奉仕論を大切にしたいと。しかし、それは間違ってると思います。あるいは地区とかクラブの職業奉仕委員長に任命されたんだけどRIの職業奉仕月間の説明、今、ご紹介した職業奉仕入門のパンフレット、その中身をどういうふうにあつかうか。今まで自分たちが学んできた職業奉仕の意味合いと全然違うことが、そこには書かれている。どうするか。無視するか。そういう悩みを抱えたことがある職業奉仕委員長もいらっしゃるかもしれません。

典型的な日本の職業奉仕論というのは、「職業奉仕はロータリーの金看板」、これ一番有名な言葉ですね。「職業を通じて社会に奉仕するのがロータリーだから、本業をりっぱにやればそれでよい。」こういう言い方をされる方もいらっしゃいます。「ロータリーは「I serve」だ。「We serve」は「L」に任せておけばいい。」「L」というのはわかりますよね。「報酬を得るサービスが職業奉仕であり、無報酬のサービスは社会奉仕だ。」私は、これは変な理屈だと思います。それから「職業を持たないク



ラブは、職業奉仕なんかできるわけがないじゃないかと。「シェルドンのモットーが職業奉仕を表す」というようなことですが、これは、みんな思い込みに過ぎないとすればどうでしょう。私は、今日、1個1個説明する時間はありません。ただ9月に2650地区の刀根バスターガバナーがこちらの「職業奉仕セミナー」で詳しくお話されたとお聞きしておりますので省略いたします。

職業奉仕の定義は1つしかありません。それは五大奉仕部門の1つとしての職業奉仕という、RIの定義です。日本の職業奉仕論は、世界のロータリアンには通じません。日本の職業奉仕論の思い込み、固定観念は、この20~30年のシニアリーダーのおっしゃっていることを引用したり、孫引きを繰り返して、さらにその人に都合のよい解釈を加えながら、形成されてきたんじゃないかと思えます。

日本で言われる「職業奉仕論」は、一言でいえば「職業倫理論」なんですね。「Vocational Ethics(職業倫理)」、あるいは「Ethics(倫理)」。実はロータリーというのは、昔も今も職業倫理を大事にし、協調する集団であったことは間違いないんです。ですから、職業倫理というのは、ロータリーの非常に大事な考え方です。

例えば、ずいぶん昔の1915年(大正4年)、初期のロータリーでは、「道徳律」というのが有名です。業界で、この道徳律を基に業界の行動規範をつくっていったというようなことがあります。その別名が「全職業人のためのロータリー倫理訓」ということであります。それから、ロータリーの目的の第2項には「職業人上の高い倫理基準を保ち」と謳われています。それからロータリアンの行動規範の一番最初に、「個人として、または事業において高潔さと高い倫理基準を持って行動する」ということも謳われております。

前年度のRI会長ジョン・ジャムさんが、RI会長になる前にインタビューで、「すべてのロータリアンが持つべき、中核となる資質と人格とはどのようなものでしょうか」と、聞かれたときの答えが「最も大切な中核的価値観は、高潔性、integrity(インテグリティ)です。高潔性がないと何もないのと同じです」と。高い職業倫理、そして高潔性というのは、ロータリアンが備えなければいけない基本的な資質と言ってもいいと思います。

ただロータリーの目的は「奉仕の理念を奨励し、それを育むことである」とさっき言いましたが、奉仕の理念の意味を説明した文章が、あまり、見当たらないんですね。一番、有名なのはチェスレー・ペリーさんが言ったとされる、今はもうないですが、RIの公式名簿に載っていた「全世界のロータリークラブは、1つの基本理念、奉仕の理念を持っている。それは他人のことを思いやり、他人の助けになることである」と。これが奉仕の理念の唯一の説明だと言われてきたんですが、ずっと古い文献に奉仕の理念の説明が書かれていました。それは「目標設定計画」というものです。

「目標設定計画」というのは、1927年、今から90年前にベルギーのオステンド国際大会で採択されたものです。これはRIが発行している、何回か改訂された「目標設定計画」のパンフ

レットです。(画面27)これは公式の文書と書いていいんですが、「目標設定計画」に基づいて、奉仕部門ができたわけです。オステンドの1927年の大会では、「クラブ奉仕」「職業奉仕」「社会奉仕」の3つの部門が決まりました。次の年にミネアポリスの大会で「国際奉仕」が加わって、われわれが良く知っている「四大奉仕部門」、2010年からは「青少年奉仕」が加わって、五大奉仕になっておりますが、そういう枠組みが決まりました。

これは、奉仕活動の実践に対応したクラブ管理運営の枠組みです。そのことが「目標設定計画」にいっぱい書かれてるんですが、その中にこういう説明がありました。「The Ideal of Service(奉仕の理念)」が意味することは、これまでさまざまな言い方で表されてきたということで、4つの言葉が並んでいました。Service Above Self.これは①「超我の奉仕」。それからシェルドンの言葉で有名な②「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」。③「他人への思いやり」。④「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」。この4つの言葉が「奉仕の理念」を意味する言葉だとして取り上げられています。

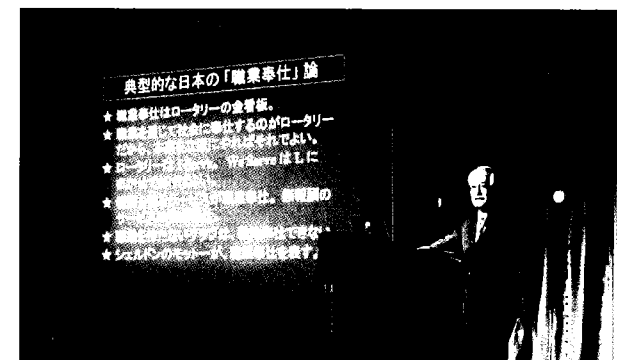
当時のロータリアンにとって「奉仕の理念」は、4つの言葉を包含した意味だと言えらると思います。逆に言うとならぬ、4つの言葉は、「奉仕の理念」の内容を示す同じ意味の言葉であったということが考えられます。

最初に③と④を説明します。③は「thoughtfulness of others(他人への思いやり)」。これは先ほどご紹介したチェスレー・ペリーの言葉と同じ意味だと思えます。④は、聖書に載っている「黄金律」と言われているものですが、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」という言葉であります。

①と②に戻りますが、これは「ロータリーのモットー(標語)」として知られている2つのモットーであります。「超我の奉仕」の「超我」というのは恰好良い言葉なんですが、意味が分かりにくいんですね。これは「サービス第一、自己第二、自己に先立つサービス」と米山梅吉さんが訳しています。この方が、意味が伝わると思えます。②の「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」。これも「最善のサービスをすれば、結果として最大の利益が得られる」というような意味合いだと思えます。

よくロータリーは2つのモットーで表されるような2つの理念があるというような言い方をされる方がいるんですが、そうではないですね。2つのモットーを一体化して捉えるというのが大事なんです。初期のロータリアンは2つのモットーを「奉仕の理念」の意味を示す同じ意味の言葉として理解し、2つのモットーを一体のもの、セットと見ておりました。

一番有名なアーサー・フレデリック・シェルドンは、ロータリーに関する一番最後の論文「ロータリーの哲学」の中で、モットー(the motto)の、「Service Above Self」と「He Profits Most Who Serves Best」の2つがハイフンでつながっています。the mottoですから単数形です。つまり、2つのモットーを1つのモットーとして言ってるんですね。そのモットーにある3つの重要概念「Service」、「Self」、「Profits」の本質を詳しく調査するということが「ロータリーの哲学」の内容です。



それから決議23-34の第1条。これはロータリーの哲学が表明されているものとして、一番有名であります。そこにも、「この哲学は奉仕―「超我の奉仕」の哲学であり、これは、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という実践的な倫理原則に基づくものである」ということが言われておまして、これも一体化して説明されていると考えていいと思えます。

2つのモットーを一体化して捉えたときに、ロータリーのモットーはどういう意味になるかという、「相手に対するサービスを自己の利益や都合より優先させよう。利益はサービスの結果である。相手のために最善のサービスをすれば、その報いとして最大の利益、満足感・幸福感が得られる」ということです。これこそロータリーの「奉仕の理念」の意味じゃないでしょうか。そして大事なことは、利益を目的とする「功利主義」ではなく、他者への奉仕を優先する「利他主義」であることです。

「Service(サービス)」の意味がいろいろ議論はあるんですが、初期のロータリーではシェルドンが理論化したように、正しいビジネスの方法としてのサービスという意味であったことは、間違いないと思えます。活動分野がロータリーではどんどん広がっております。四大奉仕が五大奉仕になりました。30年くらい前からポリオ・プラスが開始されました。2000年代代からは人道的奉仕の分野に力を入れるということとか、「未来の夢計画」という形で2013年からは財団の新しい補助金モデルがスタートいたしました。そういうふうに活動分野が広がっております。そういう現代のロータリーではロータリアンの中心的な行動原理として、最も広い意味で使われるようになっております。「人々の助けとなること」、「社会に役立つこと」、「世のため人のために尽くすこと」。そういう意味が、ロータリーが言っているServiceだということなんです。

「The Ideal of Service(奉仕の理念)」。これは「The」が付いています。「The」というのは、ロータリー固有のということだと思えます。ロータリーの奉仕の理念。これは「ロータリーが考え、実践してきた究極のサービスのかたち」というふうに、私は「奉仕の理念」という言葉を置き換えてるんですが、これではちょっと訳語になりません。意味としては「世のため人のために自分の知恵と力がある限り、全力で心を込めて捧げる」という、利他の活動が自分を生かす道、幸福への道である」というようなことが「奉仕の理念」の意味ではないかと思えます。

ロータリーの目的は、「奉仕の理念」を奨励し育むことです。これは別の言い方をすると、ロータリーの目的は、「奉仕の理

念]を広め、その価値を高めていくことと行うことができると思っています。そして、理想のロータリアンというのは、個人生活・職業生活・社会生活等人生のすべての面で、「奉仕の理念」の研鑽と実践を行う人であると言えます。

ここまでの要約をいたします。奉仕の理念がロータリーの根幹であるということです。2番目に職業奉仕の定義は、RIが言っている1つだけあります。3つめに日本の職業奉仕論は、職業倫理論です。否定しているわけではありません。4番目にロータリーのサービスは、活動の広がりに伴い最も広い意味で使われています。最後に、職業奉仕という言葉ではなく、「奉仕の理念とその実践」について語りましょうということになります。

ちょっと蛇足なんですけど、私は日本の職業奉仕論は固定観念や思い込みと思っています。その呪縛から脱するためにどうすればいいか。いろんな職業奉仕に関する文書があります。その人の主張なのか、誰かの引用なのか、それをちょっと注意されるといいと思います。

ネットで得られる情報をうのみにしないようにしたほうがいいと思います。特に、この30年ぐらい語り継がれてきた職業奉仕論は誰かの引用や孫引きが大変多いです。根拠はどこにあるか。原典は確認したのか。そういうことが必要です。主張の根拠や出典を確認する。特に英語が原本のものは、英語の原本まで確認する方がいいと思います。ときに初期のロータリアン、だいたい1920年代ぐらいまでのロータリアンが言っていることに遡って、確認することが必要なものもあります。

それから、RIが言っていることを理解することが大事なことだと思います。RIの方針やRI発行の手引書に書かれていることをまず素直に受け止めてみる。そして、何より固定観念を捨てると。先輩から教わったことを絶対視しない。疑問があれば自分で調べてみる。そして、ロータリーのいろんな見聞を広める。

ロータリアンとして成長を目指して研鑽することが大事ですし、その中で自分なりのロータリー観を確立するのが大事なんじゃないでしょうか。

私の職業奉仕とか、奉仕の理念について、書いた文献がロータリー文庫で私の名前で検索していただくという載っています。それから2550地区のウェブサイトにも載っておりますので、そのへんをご覧になると、本日、かなりはしょってお話したこともご理解いただけるんじゃないかと思っています。

そこで、このあとは私が考えてることです。これはもちろん疑ってかまいませんので、私のお話を聞いてください。

「奉仕の理念」の原点に「相互扶助 (Mutual Helpfulness)」があると私は考えております。相互扶助という言葉は、初期のロータリアンが良く使う言葉でありました。ポール・ハリスの著書、「This Rotarian Age」の中には、こういう言葉があります。「相互扶助の観念は一般的な助け・役立ちの観念に道を譲った。それを端的に示すのが『奉仕 (service)』というロータリー独特の言葉である」というふうに言っています。つまり、会員同士の助け合いから、一般的な助け・役立ちに広がるキーワードが「service」という言葉だというふうにポール・ハリスは言ってるんですね。

お互いに商売の取り引きを融通し合っただけで助け合っていたことを「物質的相互扶助」と呼んで、その「物質的相互扶助」から「精神的相互扶助」、すなわち職業奉仕に発展していったというのが、従来の日本の職業奉仕論が描く図式であります。そうじゃないんだと思います。相互扶助に「service」の観念が加わって「一般的な助け・役立ち」という奉仕理念になっていったというのが正解だと思います。相互扶助の外部への拡張が、「奉仕の理念」になったのです。

「Service, not Self」というのが、「超我の奉仕」の原型となった言葉とされておりまして、ベンジャミン・フランク・コリンズというミネアポリスの人が言った言葉とされておりまして、これも「自己滅却の奉仕」「無私の奉仕」という宗教的・精神的な言葉ではなくて、「自分たちのためだけではないサービス」つまりクラブの仲間同士の取り引きを外にも広げようという言葉だと。これは2680地区の田中毅(たけし)パストガバナーが明快にご指摘なさっていることですが、私もそう思います。

シェルドンのモットーも、1910年に最初にこの言葉が出てきたときには、「his fellows」という言葉が付いているんですね。それが1911年、次の年には「his fellows」というのが取れて、「He profits most who serves best」という言葉になったんですが、これも自分たちの仲間内や関係者に限定して適用される原則から、広く一般に通用する原則に変えたということだと思っています。

ロータリーの原点が「相互扶助の精神 Sprit of mutual helpfulness」。お互いに助け合う。お互いに分かち合う。非常に素朴ではありますが、力強い思想・精神でした。20世初頭の過熱する自由主義経済という時代風潮の中で、どちらかと言えば経済的・社会的弱者であった中小事業主の集まりであった初期のロータリアンの琴線に触れる思想ではなかったかと思っています。このロータリーの原点とも言える「相互扶助の精神」は「奉仕の理念」に形を変えて現代にいたるまで、ロータリーの一貫した思想であったというふうに私は思います。

この写真(画面51)は1917~1918年のRIの理事会、まだRIと言ってませんけど理事会のメンバーですが、右下にいるのは前年度、財団100周年で有名になったアーチ・クランプです。そのアーチ・クランプの後ろに立っている方が、チェスレー・ペリーという方です。チェスレー・ペリーは、初代の事務総長として30年以上RIの礎を築いた人です。ポール・ハリスが「ロータリーの建設者」と呼んだ人です。このチェスレー・ペリーが1921年、こういうことを言っています。「協力と親善がこれほど必要とされることは今までになかった。利己主義と不信と恐れが蔓延すれば、災難が不可避の結果となる。世界の福祉のためには、より良い生活条件や健康状態の恩恵を相互扶助の精神で、万人の間で分かち合うことが必要だ」と。

このころどういう時代だったか。ちょうど100年前ぐらいに、第一次世界大戦が起きました。これはヨーロッパ世界、欧米世界では、衝撃的なことであります。1919年には、第一次世界大戦の教訓から、国際連盟が設立されました。そして「ロータリーの目的」(綱領)に「国際平和と親善の促進」が加わった

のが1921年です。そうした危難の時代にロータリアンが大事に育ててきた「相互扶助の精神」をチェスレー・ペリーは強調したに違いないと思います。

話は飛びますが、これは日本の武士です。(画面54)とどなたか分かりますか。福沢諭吉さんです。ちょうど福沢諭吉さんというのは、幕末という時代と明治という時代を半分半分に生きた、そういう方です。その福沢諭吉さんが明治になって、こういうことをおっしゃってます。「恰(あたか)も一身(いっしん)にして二生(にしょう)を経るが如く 一人(いちにん)にして両身(りょうしん)あるが如し」。私の体は一つであるけれども、まるで幕末という時代と明治という時代の二つの人生を歩んでいるようだ、と。そういう感慨をもらしています。

実は、私は6年前に、福沢諭吉さんと同じような気持ちを感じました。2011年3月11日に東日本大震災が起きました。東日本大震災は日本の運命を変えましたが、私たちの価値観や生き方、人生を変えるような大きな出来事ではなかったでしょうか。被災地で見られた助け合いや秩序正しい行動、忍耐強さに私たちは心を打たれました。「絆」「思いやり」という言葉を私たちが強く意識するようになりました。

東日本大震災の被災者に対する支援活動に、私たちロータリアンとロータリークラブも積極的に参加しました。今でも支援活動を続けているクラブもあるかもしれません。そのとき、私たちの心を突き動かしたのは、そして行動の支えとなったのは、「職業奉仕論」ではなくロータリーの「奉仕の理念」ではなかったでしょうか。3.11のあとに、日本全体で見られた相互扶助、日本だけではなく世界中のロータリアンからのさまざまな復興支援活動。そこに私は「相互扶助の精神」、すなわち「奉仕の理念」の可能性を強く感じております。

ジョン・ジャームRI直前会長が「人類に奉仕するロータリー」というテーマで1年やりましたが、各地の地区大会に寄せたメッセージの中で、「今ロータリーはいわば転換期となる歴史的に重要な局面に立っています」と、ロータリーの現状に対する危機意識を表明されております。

そして、今年度のライズリー会長は「ロータリー:変化をもたらす」というテーマで、「ロータリーとは何か」という問いに、「私たちは行動を持って答える。奉仕を通じて変化をもたらすことによって」と、「奉仕を通じて変化をもたらす行動」、それを「ロータリーの存在意義だ」というふうに言っておられます。そして、さらに奉仕を通じてどんな変化をもたらすかは、「ロータリークラブとロータリアン一人ひとりがそれぞれ決めることです」と、私たちのクラブが変化の内容を考え、決めることを求めています。

RIは戦略計画を打ち出しております。RIの戦略計画には3つの戦略的目標というのがかかげられています。「クラブのサポートと強化」、「人道的奉仕の重点化と増加」、「公共イメージと認知度の向上」の3つです。この中の「クラブのサポートと強化」というのが、私たちのクラブにとって一番身近で重要なことが多いんですが、その一番下のところに「クラブと地区における戦略計画の立案を奨励する」ということが謳われております。

今年の規定審議会のときに、最初に代表委員の皆さんに

戦略計画の最新情報が提示されました。この中で「ロータリーがこの世界、時代に沿った存在であり続けるために、私たちは何をすべきだろうか?」という問いかけがなされています。そしてロータリーは時代に追いついていかなければならない。ロータリーは時代に適応しなければいけない。そして次なる100周年に存続していくために、ビジョンを備えなければいけないということがRI理事会でも、決定されました。

私たちは次のステップを判断するために、ロータリーの使命に目を向け、ロータリーの独自性を守るため価値観を忘れず、次の100年に向けて前進していくための新しいビジョンを築いていかなければならないと呼びかけています。RIの危機意識とビジョンづくりへの決意の表明ではないかと思っています。

RIの戦略計画におけるビジョンづくりに呼応して、クラブも地区も日本のロータリー全体も大きな転換期を乗り越えるために、新たなビジョンづくりに取り組むときではないでしょうか。

東京ロータリークラブが1920年に設立されて100年目が2020年です。3年後の2020年というのは日本のロータリーの100周年ということになります。日本のロータリー100周年に向けて「日本のロータリー100周年実行委員会」が設置されています。3つの委員会が今、活動しております。①ビジョン策定委員会②記念事業等委員会③組織連携委員会の3つです。このうちのビジョン策定委員会に第1ゾーンから私、本田。第2ゾーンからは2620地区の志田パストガバナー、そして第3ゾーンからは2680地区の大室パストガバナーが、活動しております。

2020年は、日本のロータリーの将来の方向性を定めていく大きな節目の年になるのではないかと考えています。ビジョン策定委員会では、活動を始めるにあたって昨年、論点を整理しました。▽日本のロータリー100周年をどのように迎えるのか▽日本のロータリーが直面する課題とは何か▽日本のロータリークラブはどうすれば元気になるか▽日本のロータリーが今後も存在感と影響力を高めていくには何が必要か▽日本のロータリーの奉仕の新世紀に相応しい未来志向のビジョンとは何か▽世界のロータリーに発信すべき価値あるビジョンとは何か。ということで、ビジョン策定委員会の目標を次のように定めています。「日本のロータリーの現状と課題を明らかにし、全国のロータリアンの合意を形成しながら、世界のロータリーに発信できる、日本のロータリーの希望あふれるビジョンを描く」というものです。

このビジョンの策定を進めていくときに、忘れてはならない視点があると思っております。4つあります。1つ目は、一つ一つのロータリークラブが元気になるビジョンでなければならない。2番目に、日本のロータリーの現状と課題を明らかにし、それを踏まえたものでなければならない。3つ目に、日本のロータリアンの英知を集める。それから4つ目、世界のロータリーと協調していける。そういうビジョンでなければいけないというふうに考えております。特に1番と2番が私は非常に大事だと思います。

日本のロータリーの現状と課題を明らかにするために、私どもが取り組んだことがあります。これは2017年11月号の「ロータリーの友」の、横組みの28ページから32ページに載っています

が、日本のロータリー100周年委員会のアンケートを全クラブに出しました。その調査結果であります。ぜひ、詳しくご覧になっていただきたいんですが、インターネットによるウェブアンケートということで、そのときの2264クラブに実施したのですが、アンケートの回収率が61.5%という大変大きな反響がありました。その中で「クラブが直面している課題は何か」という質問に半数以上クラブが会員の高齢化、会員の減少を大きな課題だと考えているというのがありました。それから、入会候補者がいない。例会の出席率が悪い。会員間に意識のギャップがある。女性会員が未入会というふうなことがあげられておりました。

クラブ運営についても聞いています。例会・委員会活動がマンネリ化している。ネット対応が不十分。ロータリーの研修、クラブ内でのロータリー研修が不足している。公共イメージ、認知度が低いのが課題だ。それからクラブのビジョン・戦略計画についてはまだ手がついてないということも言われてます。こういうふうにいるんなクラブがいろいろ課題を抱えているということなんです。

それから柔軟性ですね。例会とか、出席とか、会員身分の柔軟性が昨年の規定審議会で大幅に認められるようになりました。そのことも聞いております。クラブとしてどのように対応しましたかというので、柔軟性を導入したというクラブが23.5%ありました。今後、導入する予定と答えたクラブも合わせると41.7%、4割以上のクラブが柔軟性を取り入れようとしているということで、私は意外に多いなと。もっと少ないんじゃないかと思ったら、結構多くのクラブが自分たちのクラブをよくしていくために、柔軟性をうまく活用しようということをやっているというのが分かります。

クラブで明文化された戦略計画ありますかという問いかけに、検討中も合わせれば4割ぐらいあるんですが、明文化されたビジョン戦略計画があるとはっきり答えたところは、13.0%に留まっております。

『ロータリーはどこへ行く。昼飯を食べに行く』。これは皆さんもよくご存じの劇作家、バーナード・ショーの言葉として有名です。1930年RIDDIのエジンバラ大会にバーナード・ショーが招待されて、講演してくれと頼まれたんですが、断ったんです。バーナード・ショーは、その断ったときの手紙にこういうことを書いています。『エジンバラまで見に行かなくても、私はロータリーがどこに行こうとしているのか分かる。昼飯を食べに行こうとしているのだ。いつも、この国でやってるのは、その程度だからだ』。ずいぶん、ばかにされたもんだなと思いますが、この87年前のバーナード・ショーの言葉は、現在のわれわれにとっても、切実な問いかけになるんじゃないでしょうか。そして、私たちは、「私たちのクラブはどこに行く」という問いかけとして、考えなければいけないんじゃないでしょうか。今日は詳しくお話する時間はありませんけども、クラブのビジョンづくりを仲間とともに進めれば、「私たちのクラブはどこに行く」という問いの答えも見つかるというふうに私は考えております。

日本のロータリーと国際ロータリーの間には、不幸な現状があると思います。日本のロータリーは世界全体のロー

タリー運動の中で、大きな潮流や変化に取り残されているんじゃないか。疑問や不満を感じる日本のロータリアンが増えているんじゃないか。このままではRIと日本のロータリーの意識のギャップがどんどん広がって、日本のロータリーは孤立していくんじゃないかというふうに私は心配しています。日本のロータリー100周年をどのように迎えるかが問われているのではないのでしょうか。

日本のロータリーには2つの道があると思います。1つは、国際ロータリーの方向性に背を向けて、日本独自の孤立路線を歩む。もう1つは世界的ネットワークの重要な一員として、理念と活動の両面で21世紀のロータリー運動にリーダーシップを発揮できるようになるのか。このどちらの道を歩もうとしているのか。私は後者の道を歩むべきだと思いますけれども、そのときに壁になりかねないのが、本日、前半にお話した「職業奉仕」という言葉に対する認識のずれなんですね。

ただ、ギャップが広がっているという言い方をしましたけど、ちょっと期待できることがあるんですね。次の年度の会長になるバリー・ラシンさん、この方が会長になるときに面接があったそうです。面接でいろんなこと聞かれて、それに回答するんですが、その中でこういうことを言ってます。

「RIは顧客であるクラブとロータリアンとのつながりを失ってしまっています。ロータリアン、ロータリークラブとRIとの間に効率的で効果的なコミュニケーションが取られることを願っています。RIはクラブの実態を把握できておらず、一方クラブはクラブでRIの組織内で何が起きているのかを知らず知らないものも多くあります」。こういうことを言う方がRI会長になれるというのは、すごく私は期待できるんじゃないかなと思います。RIと私たちのクラブの間に距離感があるんだとしたら、その距離をお互いに埋めていく必要があると思いますが、RIの会長がそういうことを意識されているということは、私たちが積極的にRIとか世界のロータリーに対して、いろんなことを日本から発信していかなければいけないんじゃないかというふうに思います。

昨年の規定審議会で学んだことが、いっぱいあります。規定審議会は世界ロータリーの縮図です。いろんなことをいろんな国の人が主張しております。日本のロータリーは、そのいろんな国が言っていることを、もっともっと受け止めないとけないと思いますし、日本のロータリーも日本のロータリーとして考えていることを発信していかなければいけないんじゃないかなと思います。それから、柔軟性が導入されクラブの自主性が益々求められている。

そして、これが一番大事なんですが、私たちの提案で組織規定が変えられるということです。クラブとか地区大会で制定案を提案できる。その制定案が規定審議会で採択されれば、そのことがロータリーの規約に載るわけです。ですから、どんどんそういう提案を日本からもしていく。明日の地区大会でそういう制定案を提案することを決議するということが予定されているようですので、ぜひ、こういう形で規定審議会でどんどん発言をしていくのがよろしいかと思えます。

伝統的「職業奉仕論」で培ってきた日本のロータリアンの知恵を、共通言語の「奉仕の理念」で世界に発信していくことが

重要だと、私は思っています。世界のロータリーとの対話を通して、ロータリーの「奉仕の理念」とその実践について共通認識を醸成していく姿勢が大事なんではないでしょうか。そして何より「奉仕の理念」の実践が大事なことだと思います。奉仕の理念をこれからも大事に守り育て、人生とロータリー運動の中で実践していけば、よりよい世界の可能性と希望が見えてきます。

「職業奉仕」という言葉ではなく、「奉仕の理念」という言葉で語り、「奉仕の理念」を実践しようというのが私の今日の話の、実にシンプルな結論であります。

「不易流行(ふえきりゅうこう)」という言葉がロータリーでよく言われることがあります。変えてはいけないことと、変えていくべきことがある。ロータリーの理念は不変だが、方法や奉仕実践の分野、組織運営あり方は時代の要請にかなうべく変化させていくべきである。それを不易流行という言い方でよく言われます。私もこの言い方に概ね賛成ですが、ロータリーの「奉仕の理念」は100年前のままではないんですね。多くのロータリアンによる奉仕の実践の積み重ねによって「奉仕の理念」という人生哲学は、他者のために尽くすことが即、自らの幸せ・喜びになるという究極の利他主義まで進化・成長していったんじゃないかというふうに私は思っております。

時代の変化や奉仕分野の拡大にもかかわらず、「奉仕の理念」は私たちの事業の基礎として、そしてロータリアンの最重要の行動原理として、普遍的な価値と意義を持ち続け、さらに進化・成長していると言っていると思います。「ロータリアン」であるとは、私たちは1つの生き方を選択したのだと思います。ロータリーの「奉仕の理念」は、どこか遠くにあって仰ぎ見るものではなく、自分の生活の中に実現すべきものではないでしょうか。職業人であるロータリアンの拠りどころとなる実践的な人生哲学でもあります。ロータリーの「奉仕の理念」の実践が、社会の中で自分を活かす道であり、社会をよい方向に導く強い力を持っていることを、私たちはもっと信じていいんじゃないでしょうか。

現在の「ロータリーインターナショナル」という呼称が定まったのが1922年。その1922年にポール・ハリスに、「これから先どこまでロータリーは発展していけるのだろうか」というふうに周囲の人たちが心配して尋ねるわけです。それを聞いたポール・ハリスは、いつも「一番いい時代はこれからだ」と答えていたそうです。

私たちが2020年。そして、その先の時代に自信を持って「ロータリーが一番いい時代は、これからだ」と言えるようにしたいもんだと思います。

本日は、時代の変化についてはあまり触れませんでした。時代がどう変わろうとロータリーは「奉仕の理念」を極めていくことが大事ではないかと思えます。

最後に誰かが言った名言を紹介して終わりにしたいと思えます。『未来は予測するものではない。自らが創るものだ』。ロータリーの未来は、私たちが一緒につくっていきましょう。ご清聴ありがとうございました。

#### 【質問】

松本 佐賀西ロータリークラブの幹事をしております松本と申します。本田パストガバナー、貴重なお話ありがとうございました。「奉仕の理想」「職業奉仕論」いろいろ勉強になることがたくさんありましたが、私にはまだ難しいところもあります。

本田パストガバナーが100周年ビジョン策定委員会の委員長をされているということで、先ほどありました、目標であります現状と課題を明らかにして、というお話がありましたけれども、本田パストガバナーが考えていらっしゃる、現状は今回の「ロータリーの友」を私も見せていただきましてけれども、課題として考えているものがありましたら、教えていただきたいと思っておりますけれども。

本田 ありがとうございます。課題は、先ほどのアンケートにもありましたように、クラブが抱えている課題が、日本のロータリーの課題だと、簡単に言うとそういうことだと思います。それは会員の高齢化、会員の減少というのが一番大きな課題として、半数以上のクラブが考えているわけです。そういうものをどういうふうにクリアしていくか。元気なクラブをつくるのが一番大事だと私は思っているんですね。元気なクラブをつくれれば、会員増強できるんです。ですから、元気なクラブづくりを考えるのが一番大事だと思っております。元気なクラブづくりのためにできることは何かということ、これからもっと多くの皆さんの声を聞きながら形づくっていただければいいなと思っております。

松本 ありがとうございます。時間もないのでもう1点だけ。先ほど柔軟性の導入について当地区のセミナーでも変わるべきところは、変えていく。変えなくていいところは続けていくという話を何度も聞いて、柔軟性の導入で本当にクラブが元気になるのか、よくなるのか。先ほど、本田様の発言では、意外と多かったなというご意見がありましたけれども、柔軟性の導入についてひと言でどうお考えなのかというのを聞かせたいですけれども。

本田 実は柔軟性の導入については、規定審議会で決まる1年前に、理事会提案が示されたときに、群馬の地区指導者育成セミナーで議論をしたことがあります。つまり、決まる前に、柔軟性の導入についてどう思いますか、と。私はほとんどのクラブが反対するだろうと思ってたんですね。ところが、そうでもなかった。つまり柔軟性を導入してでも会員数を増やしたいとか、もっと魅力的なクラブになりたいとか、会員が出席できるようなクラブにしたいかと思っているクラブは意外とあるというのが、そのときの印象だったのですが、今回のアンケート結果でも、結構多くのクラブが導入されているなと思っております。

ただ、柔軟性を導入すればすべてがよくなるかどうかというのは、まだ分かってないと思います。柔軟性を導入されたクラブはそれを目指して、元気なクラブを目指して、やっておられると思いますので、それはいいんですけども、今年の決議審議会で群馬から提案したことは、RI理事会は柔軟性の導入によって、柔軟性を導入したクラブがどういう成果があったかということ、毎年きちんと全世界のクラブに対して報告してくださいよ。つまり柔軟性の導入の効果について、もっとオープンにして教えてくださいということを決議案で提案しています。そういうことが必要じゃないかと思えます。